

流年之感

断简

上司小剣自筆原稿

西垣文庫

文庫 10

8855

4





NOV 16 4 PM 1971

下

太平洋の戦心

上野司 小川

學藝原稿

秋は秋と、思つた。早く歳晚

か近づいて来、あとかさあとかさ追つかけ

られるやうな気がする。秋のすく歳晚につ

らしい。あめなびさういふものがなくあつた

やうな生活をいふ。この息がある

見、日曜日には神宮球場に野球を見、全く

時代の異に、かくともその間に二三百年の

隔りのありさうな二つのものを一日ちかひ

に見るといふのが、私業のいま生きてゐる時

代の姿である。土曜日も野球があつて、能楽

堂の休憩室にその戦蹟が貼り出され、人は

蜘蛛の妙技を誇つて、その前へ来た。6A対の

か、終日ね、でもこれ、空前絶後の上出

来、よ、日本軍の、あつて、嘆の聲は、能

舞の前の、後、テが必死をまはめた。舞の

前にさへ聞かぬ、あ、ア、心、さ、し、ま、時、代、の、波

(東京文房堂製)